Ⅳ 今後に向けた課題

1．幸手市の現状・問題の要点

基礎情報の整理、市民・利用客へのアンケートの結果およびヒアリングなどで得られた運行事業者、関係者からの情報・意見から、本市の地域および公共交通の現状・問題の要点は以下のように整理されます。

地域の概況

（人口の状況）

- 人口はすでに減少に転じており、少子・高齢化が進んでいます。
- 一人暮らしの高齢者や、高齢者だけの世帯は、市域に広く散在しています。
- 人口減少、少子・高齢化は今後も進む見通しであり、クルマを運転しない高齢者などの外出手段の確保は、今後ますます重要になると考えられます。

（施設の立地状況）

- 大規模小売店舗や医療施設は、概ね東武日光線、国道４号（日光街道）の沿線のエリアに集まって立地しており、これらを利用するには、市内での交通手段が必要な状況です。

（市民の移動の状況）

- 市民の半数以上が市外へ通勤・通学しています。現状では、クルマで通う人が特に多く、鉄道も一定の利用がありますが、バスの利用は少ないのが現状です。

（観光の状況）

- 桜まつりで本市に多くの観光客が訪れますが、来訪手段はクルマが中心となっており、駐車場周辺で混雑が生じています。

（その他）

- 高齢ドライバーの交通事故防止対策が社会的な課題になるなか、本市の高齢者の半数以上が免許証を保有しています。
- その他、クルマ中心の外出スタイルとなっていることで、地球環境面やまちなかの賑わいなどへの悪影響が生じることも危惧されます。

公共交通の現状

（公共交通のネットワーク）

- 本市の公共交通ネットワークは、鉄道、路線バス、市内循環バス、タクシーで構成されており、概ね市内をカバーしています。バス、タクシーは駅に発着し、鉄道と乗り継ぐことで県内他都市や東京方面に移動することができ、ネットワークとしては概成しています。

（公共交通の利用状況、運営状況）

- 鉄道、路線バス、タクシーの利用客数はコロナ禍以前からすでに微減傾向にあり、コロナ禍で大きく落ち込みました。
- 市内循環バスは、利用客数がきわめて少なく、経費に対して収入が大きく不足している状況です。
- バス、タクシーの運行事業者は、全国的な乗務員不足・高齢化が深刻となっており、きわめて厳しい運営状況にあります。

本市のまちづくりにおける考え方

- まちづくりの上位計画において、既存の主要な公共交通や多様な輸送資源が連携した「持続可能な公共交通ネットワークの確保」、地域の特性・ニーズの把握、公共交通の改善、市民全体で守り育てる意識の形成と積極的な利用による「市民の移動手段の継続的な確保」、利便性向上のための改善や見直しによる「市内循環バスの充実」が施策の考え方として示されています。

市民の外出状況・意識（市民へのアンケート結果より）

（運転免許証に対する意識）

- 免許証の返納については考えていない人が大半です。

（外出状況、外出手段）

- 通勤・通学のほか、買い物や通院に出かける人が多くなっています。
- 外出手段は、クルマ（自ら運転、家族などの送迎）がきわめて多くなっています。鉄道、自転車も一定の利用があります。
- 市内循環バスは、利用していない人がほとんどであり、決まった人がよく利用している状況です。
- 市内循環バスを利用しない人は、「車など他の交通手段がある」との理由が多数です。
- 市内循環バスの満足度では、運行本数のほか、乗り換えについて不満が多くなっています。また反対回りの便を希望する意見も多く得られています。

（今後に向けた考え方）

- アンケート時点では、移動手段に困ることのない人が大半です。困った際にはタクシー、家族・知人による送迎などで対処されています。ただし、今後充実してほしい公共交通として、市内循環バス、路線バスが挙げられています。
- 市の財政負担は現状のままで公共交通を維持すべきとの意見が多数となっています。一方で、公共交通を現状よりも充実すべきとの意見も多数となっています。
- 充実すべき内容として、交通弱者の移動手段を確保すべきとの意見が大半を占めています。

市内循環バスの利用状況（乗降客調査結果より）

- 東コース、西コースの利用客数はきわめて少なく、夕方には利用がない便もあります。
- 別のコースに乗り継ぎ可能な市役所や、鉄道に乗り継ぐための幸手駅の乗降客が多くなっています。その他には利用客が集中するようなバス停はありません（年間の利用実績をみると、頻繁には利用されていないが、時々利用されるようなバス停が多く見られます）。
- 市内循環バスは、平日の利用は高齢者が多く、休日には 30～60 歳代にも利用されています。
- 他の交通機関と乗り継ぎをせず、徒歩圏で利用する人が多くを占めています。ただし、鉄道との乗り継ぎのほか、市役所、ウェルス幸手で乗り継ぐ人もいます。

鉄道（幸手駅）利用客の意見（鉄道利用客へのアンケート結果より）

- 平日は「通勤・通学」が多く、休日は「趣味・遊び・習い事等」が多くなっています。東武沿線の埼玉県内へ出かける人が多数を占めますが、休日は東京都内へ行く人のほか、本市へ来訪する人が増える傾向があります。
- 幸手駅で、鉄道と他の交通手段を乗り継ぐ人は少なく、徒歩・自転車で駅へアクセスする人が大半です。
- 鉄道に望まれることについて、「特にない（今のままでいい）」との意見が多数です。次いで「昼間の便を増やす」、「待ち時間を快適に過ごせるようにする」との意見が多くなっています。

困り事のある人の状況（民生委員・児童委員へのアンケート結果より）

- 買い物、通院で困り事のある人（相談者）は、ふだんクルマ（自分で運転、家族などの送迎）、徒歩、自転車を使っている人が多いものとみられます。
- 困り事のある人は、いつもではなく、ときどき困ることがある状況です。その場合、家族・友人・知人の送迎、タクシーなどで対処しているものとみられます。
- 困り事のある人のために充実したほうがよいものについて、委員の意見としては、個別の送迎である福祉タクシーと、公共交通である市内循環バスがともに多く挙げられています。

市内循環バス利用客の意見（市内循環バス利用客へのアンケート結果より）

- 通院、買い物での利用が多数を占めています。
- 週に１～２日利用する人が最も多く、日常的に利用する人が多いことがうかがえます。
- 利用客の困り事は、停留所が遠い、乗り換え方法がわかりにくい、時刻表がわかりにくい、の順で多く挙げられています。
- 市内循環バスに望まれることについて、運行本数を増やすことに次いで、反対回りの便の設定が多数となっています。

運転免許証返納者の状況（運転免許証返納者へのアンケート結果より）

- 自動車がないことに不安を感じるが、運転の不安や家族の勧めで免許証を返納したという人が大半を占めています。
- 免許証の返納後の外出手段は、「徒歩」、「自転車」が特に多く、次いで、「自動車（送迎）」、「タクシー」、「市内循環バス」が多くなっています。

2．今後に向けた課題・着眼点

地域・公共交通の現状や市民などの外出状況・意識をふまえ、本市の公共交通の今後に向けた課題・着眼点として以下が挙げられます。

●高齢化の進展をみすえ、市内の外出手段を確保すること

本市では、今後も少子・高齢化が進み、クルマを運転しない高齢者や一人暮らしの高齢者が増える可能性があります。したがって、公共交通などによって、市民などの日々の生活における外出手段を確保することが必要となります。

●厳しい運営状況で、人口減少も見込まれる中、将来にわたり、公共交通を持続していくこと

本市を運行するバスなどは、利用客数がきわめて少なく、さらに、人口減少、乗務員の不足・高齢化によって、厳しい運営状況となっています。したがって、将来に向け、地域の実情に見合った形で、公共交通を確保し持続できるようにしていく必要があります。

●外出の利便性を確保する方策を模索すること

公共交通を利用する市民などは少数であり、クルマを利用できるため外出に関する困り事のない人が多い状況ですが、実際に公共交通を利用している人からは、乗り継ぎや運行方法について不便との意見があります。限られた資源の中で、運行の調整・工夫によって、外出の利便性を確保する方策を模索することが必要です。

●全体として、「わかりやすさ」を充実すること

公共交通を使う人、使った経験のある人から、バスの乗り換えの方法や、路線・時刻表がわかりにくいとの声があり、これらが利用の抵抗感になっている可能性もあります。実際にバスなどを利用する人も、決まった路線の決まった便を使っているように見受けられます。これらに対し、公共交通全体のわかりやすさを充実する必要があります。

●乗り継ぎの拠点となる場所の「待ち環境」を充実すること

市内には、バスと鉄道とを乗り継ぐ幸手駅、市内循環バスのコース間を乗り換える市役所、ウェルス幸手などの乗り継ぎ拠点があります。日常的に公共交通を利用している人からの要望もあるため、待ち時間が長くても快適に過ごせるように待ち環境を充実することが必要です。

●公共交通への意識を醸成し、クルマ中心の外出スタイルの見直しを図ること

本市では、バスなどの公共交通を利用しない市民が大半であり、クルマを使えるかぎり公共交通が外出手段として意識されていないように見受けられます。この状況では、公共交通を確保・持続しても利用されないことが危惧されるため、少しずつでも、使える時に使える方法で公共交通を利用する意識の醸成を図っていくことが必要です。

●観光・まちの賑わい、福祉、地球環境、健康、交通安全など、多様な分野との連携を模索すること

現状では、市民だけでなく観光などの来訪者もクルマを利用する人が大半です。クルマによるドアツードアの移動と比べ、公共交通の利用と歩くことによる移動は、多様な面でよい影響があると考えられるため、関連する分野と連携しながら公共交通の取り組みを行っていく必要があります。